

となって頂いて大学院生として東京天文台で働くようになった。他に引き受け手がなかったので、廣瀬さんが東京天文台におられなかったら、私も天文では就職できなかったのである。廣瀬さんにであわなければ、測地学の研究に眼をむけることはなかったろう。

廣瀬さんは私達からみると非常にユニークな家庭をきずかれ、非常にユニークな3人のお子さんを残された。お子さん達とはよく一緒に遊んでおられた。未亡人やお

嬢さんのお考えで、廣瀬さんの告別式は11月7日、三鷹市の国際キリスト教大学の教会堂で行われ、悪天候にもかかわらず何百人もの人が参列した。

廣瀬さんは勲二等の勲章を受けられることになっており、11月3日には公表されるはずであった。伝達式には自分は出席できないから、私に代りにでてほしいというような廣瀬さんの話が、私達の最後の会話となった。

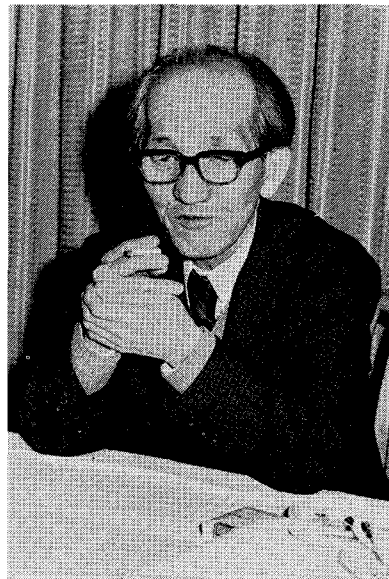
廣瀬先生の思い出

堀 源 一 郎

廣瀬先生がお亡くなりになってから、もう一箇月になる。10月28日に京都で先生の訃報に接したときは、私にはあまりにも突然のことで驚愕した。先生に最後にお目にかかったのは5年前で、それも久々にお会いしたのであったが、その時の先生はお元氣な上に昔と全く変わらないように見受けられたからである。大体、廣瀬先生は昔からお年の割に博覧強気にして老熟の風があったのだが、それにしても、5年前の先生はもっとずっと昔の先生とちっとも変りないように私には思われた。

私はたまたま天体力学を専攻したおかげで、廣瀬先生のもとに博士論文をものすることになった。そして親身の御指導を受けた。先生は博覧強気兼老熟の故にか、頑固一徹にして近より難しという風評もあったかに聞いているが、たしかに頑固一徹であるにしても私にはまことに親しみ易い先生であった。私事に渡るが、6年前に天文の通俗本を著わした折、編集部から推薦文をどなたにお願いするかと尋ねられて、すぐ廣瀬先生が頭に浮かんだ。そして先生は即座に一文を寄せて下さった。

先生の講義は天体力学と軌道論を聴いた。天体力学は種本がモールトンで、特に摂動論の幾何学的(定性的であるが直観的)表現は独特のものであった。当時の筆者は青二才で、(これは若い人に一般的のようだが)数式による完璧な表現の方を好んだのだったが、どちらもわかってしまうと、前者の方に魅力がでてくるのである。筆者も、当時の廣瀬先生くらいの年齢になって、やっとわかってきた。軌道論の方は、やはり種本はあったのだろうが、要するに先生独自に料理された名講義であった。その講義をもっと多くの人々が手に取れるよう本にすることを度々先生に迫ったのであるが、実現に到らなかった。ただ、軌道計算アルゴリズムともいうべきガリ版の小冊子が残っているのは幸いである。なお筆者は聴講の機会を逸したののだが、先生には日本天文学史(江戸時代)の講義もある。その一部がやはりガリ版で小部数が出まわっているようだが、何とか先生の講義を復原したいも



のだ。

筆者は1959年7月から2年余りエール大学に留学したが、渡米した年の暮に廣瀬先生にお目にかかる機会があった。もう20年以上も昔のことで、したがって、先生は今の筆者くらいの年齢であったのかと思うと感慨もひとしおである。たしか筆者がケンブリッジ(ボストン近郊)に出向いて先生とお会いして、当時、在ケンブリッジの古在さんと廣瀬先生とをお連れして(正確にいうと古在さんの車で先生と筆者が連れられて)ニューヘブンまでドライブした。エール大学天文台には未だブラウワー台長が健在で、天体力学のメッカの雰囲気があった。古在さんはエール大学迎賓館に一泊して大いに気分を良くして翌日ケンブリッジに帰り、廣瀬先生はそのまま残って数日ニューヘブンに滞在され、その間筆者がお供をしたと、このように記憶している。そのうちの1日はニューヨークに行ってヘイドンプラネタリウム館を訪れ、また1日は、ニューヘブンからボストンに行く道程の半

ばにあるミステック博物館を訪れて、古い時計のコレクションを見学した。このミステック行きの日の上々の天気、ニューイングランドの12月初旬にしてはポカポカと暖い小春日和であった。天文台手配の運転手付ワゴンに乗って(天文台にはワゴンしかなかった)。途中の何とかという所で、運転氏推薦の何とかという著名なシーフードレストランでオイスター・カクテルなんかも含まれたリッチな昼食をとった。廣瀬先生は、そして筆者も運転手氏も大気嫌であった。

1976年の暮にある出版社の企画で廣瀬先生と対談する機会があった。星の博物誌というテーマであったが、要するに何でも話題になってしまうような雰囲気、先生もまことに楽しんでであった。そしてこれが先生とお目にかかった最後である。今、その収録記事を読み返すと、私の心の中には、5年前の先生の生き活きとしたお顔の表情や、「そりゃおかしいよ堀くん」なんていわれた時の手振りまでよみがえってくる。

故廣瀬秀雄氏略歴

明治 42. 8. 14	兵庫県に生まれる。		授
昭和 7.	東京帝国大学理学部天文学科卒業、大学院に進む。	45.	埼玉大学教授、この間同大学評議員を歴任
12.	東京天文台技手	50.	埼玉大学名誉教授
16.	東京帝国大学助手	50.—55.	専修大学教授
17.	東京天文台技師	56. 10. 27	死去
24.	理学博士、東京大学東京天文台助教授		なお、測地学審議会委員、学術審議会専門委員、理科教育審議会委員などのほか、日本学術会議会員、天文学研究連絡委員会幹事、日食研究連絡委員会委員、測地学会委員長、国立科学博物館評議員などを歴任した。また、国際的には国際天文学連合の小惑星・彗星委員会組織委員、天文電報委員会委員を務めた。
26.	東京大学東京天文台教授		
38.—43.	東京大学東京天文台長、東京大学評議員		
40.—42.	日本天文学会理事長		
45.	東京大学を停年退職、東京大学名誉教授		

故廣瀬秀雄博士主要著書・論文目録

著書 シュミットカメラ：河出書房 1947/天体軌道論：日本天文研究会 1949/宇宙：講談社 1965/宇宙を見る：旺文社 1965/コペルニクス：牧書店 1965/おはなし宇宙めぐり：実業之日本社 1968/日本人の天文観：日本放送出版協会 1972/年・月・日の天文学：中央公論社 1973/天動説から地動説へ：国土社 1979/望遠鏡：中央公論社 1973/暦、日本史百科：近藤書店 1978/太陽・月・星と日本人：雄山閣 1979/初等天文学演習：恒星社 1979/天文学史の試み：誠文堂新光社 1981。

編・共著 [] は共著者名などを示す。太陽と月〔畑中〕：三省堂 1951/標準星図〔中野〕：地人書館 1954/地球と月〔新天文学講座〕：恒星社 1957/月を歩く〔古在〕：法政大学出版局 1958/全天恒星図〔中野〕：誠文堂新光社 1959/彗星とその観測〔関〕：恒星社 1963/天文気象〔カラー図鑑〕：小学館 1968/彗星を追う〔古川・香西〕：地人書館 1971/近世科学思想下〔中山・大塚〕：岩波書店 1971/洋学下〔中山・小川〕：岩波書店 1972/宇宙のひみつ：学研 1972/コペルニクスと現代〔湯川他〕：時事通信社 1973/暦：ダイヤモンド社 1974/関孝和全集〔平山〕：大阪教育図書 1974/宇宙地球〔万

有百科大事典〕：小学館 1975/レンズマジック：日本ブリタニカ 1980/天文暦学諸家書簡集〔上原・小野〕：講談社 1981。

分担執筆 日食の観測法とその整理〔日食〕：恒星社 1948/日食と掩蔽の観測〔天体観測入門〕：恒星社 1951/彗星及び小惑星、天体写真儀〔天文学の概観〕：日本学術振興会 1951/彗星〔太陽系〕：恒星社 1957/掩蔽とその観測〔地球と月〕：恒星社 1957/望遠鏡と天体写真〔天文台と観測機械〕：恒星社 1958/小惑星彗星の軌道決定、流星の軌道決定〔天体の軌道計算〕：恒星社 1958/人工衛星の見え方、精密写真観測〔人工衛星〕：角川書店 1958/大望遠鏡による天体写真〔現代の天文学〕：恒星社 1958/太陽系の力学〔宇宙の探究〕：岩波書店 1960/188 cm 望遠鏡による天体写真〔楠木・宮地還暦記念論文集〕：恒星社 1963/時の沿革、時の基準〔時の科学〕：コロナ社 1966/彗星天文学〔彗星その天文学〕：誠文堂新光社 1974/伊能忠敬の全国測量と経度問題〔伊能忠敬の科学的業績〕：古今書院 1974。

主要研究論文〔小惑星彗星流星など〕小惑星の軌道の調査報告(第二～十報)：台報 1~3 1933~35/ダニエ